

山重 慎二 編著

『日本の社会保障システムの持続可能性 —データに基づく現状分析と政策提案—』 (中央経済社)

立教大学経済学部准教授 安藤 道人



「社会保障の持続可能性の分析」と言われると、社会保障財政のことだと思える人は多いだろう。だがふと立ち止まって考えると、これは不思議なことでもある。たしかに社会保障財政の持続可能性は重要な政策テーマだが、「財政」が持続していることと、「社会保障」の役割・機能が持続していることは、また別の話だからだ。

本書のタイトルは「日本の社会保障システムの持続可能性」だが、本書の主題は「財政」ではなく「人」の観点からの持続可能性である。ここでの「人」とは何かについては後述するが、

本書が着目している社会保障の持続可能性とは、財政のみで括られるものではない。まずこの点に、類書にはない本書の特色がある。

まず本書の構成を簡単に説明しよう。序章では「日本の社会保障は持続可能か?」という本書のベースとなるリサーチクエスチョンを提示したのち、強靱性（レジリエンス）というキーワードと「社会保障制度を支える『人』に注目」という本書のアプローチが解説される。その後、データ分析手法についての簡潔な補論の後に、医療と介護の強靱化（第I部）、家族と労働力の強靱化（第II部）、子育て世帯の強靱化（第III部）という順番で、実証分析が行われる。そして終章として、日本の社会保障システム全体の強靱化についての考察・検討が展開される。

本書の骨格部に相当する第I部から第III部は、計8本の論文からなっており、それぞれ異なる研究者による様々な記述統計分析・計量経済分析・シミュレーション分析の論文で構成されている。これらの論文の分析テーマや分析手法は多様だが、どの論文でも、「社会保障制度を支える『人』」に着目した実証的な分析が行われている。

第I部のテーマは医療と介護であり、「人」としては、医師（第1章）、介護労働者（第2章）、ヘルスケア産業労働者（第3章）に着目してい

る。第1章では医師の偏在や働き方改革の問題を、第2章では介護労働者の労働供給や賃金の問題を、それぞれ詳細な個票データを用いて検証している。また第3章では、シミュレーション分析によって人口高齢化による医療介護需要増がヘルスケア産業を含む産業構造を通じて経済に与える影響を検証している。

第II部のテーマは家族と労働力であり、「人」としては、育児ケアの提供主体としての祖母（第4章）、保育需要主体としての親（第5章）、保育士（第6章）に焦点があてられる。第4章と第5章は、社会保障制度が生み出すケア・セクターにおける労働者ではなく、家族を中心としたインフォーマル・ケアの担い手としての「人」に焦点を当てている。一方で第6章は、フォーマルケア・セクターの労働者である保育士の労働供給・労働市場を検証しており、検証対象としては、第1章の医師の分析や第2章の介護労働者の分析との共通性もある。

第III部のテーマは子育て世帯であり、「人」としては、子育て世帯（第7章・第8章）を取り上げている。第7章は出生の意思決定についての理論的分析であり、第8章は、子育て支援の民間団体の活動と人々の出生行動の関係を、アンケートデータを用いた計量分析と事例研究によって検証している。

そして最後の終章は、再び社会保障システム全体に視野を広げ、これまでの分析や考察を踏まえて、社会保障システムの強靱性について考察している。その上で、社会保障システムの強靱化に向けた7つの提案がなされる。

本書は、さまざまな個別の実証研究を集めた論文集という特徴をもった書籍であるため、序章や終章で掲げられたような「社会保障システムの強靱化を『人』という観点から検証する」という問題意識が、各章においても明確に貫か

れているわけではない。むしろこの「強靱化」や「人への注目」は、各々の実証研究を踏まえた、編者なりの見解と見るべきかもしれない。

しかし、このような「未完成のパッチワーク」（終章。P.162）だからこそ、本書は、社会保障を検討する際に考慮すべき論点や視点が多様であることに気づかせてくれる。そして、社会保障をめぐる論点・視点の多様性の存在を認めることが、社会保障の「システム」の持続可能性を検討する際に必要な視座であるというメッセージも、本書には含まれていると感じられる。

最後に、執筆者（安藤）の関心にも引き寄せた形で、本書の特長について記したい。社会保障の研究は、（1）制度の対象者に対する効果や影響、（2）財政、（3）制度や歴史に焦点を当てたものが多い。一方で、社会保障システムが雇用や家族も含めて国・社会のあり方に与える広範な影響については、個別の実証研究や国際比較研究は多く存在するものの、一国内のデータを用いた体系的な実証研究は少ない。本書の「未完成のパッチワーク」をさらに広げ、その全体像の理解に努めることが、後に続く研究者に残された課題である。